



プラテュス

πλατύς

幸運の女神は用意された心の中に宿る

大学院保健科学研究院長 小林 清一

北海道大学における保健医療系教育が88年の歴史を経て、昨年4月に待望の大学院保健科学院・大学院保健科学研究院設置を果たし、早くも1年を迎えようとしております。従前の医学部保健学科での学部教育に加えて新たに修士課程第1期生31名の大学院教育を実践し、また、大学院保健科学研究院としての部局並びに研究体制の整備に取り組んだこの1年を振り返りつつ、平成21年度に向けた保健科学教育と研究への展望を探りたいと思います。

先ず最初に部局としての組織整備は、30本を越える規程、内規、細則、申合せなどの策定や改正からスタートしました。スピーディな組織運営と政策の企画・立案のために企画戦略室メンバーによる執行部体制を確立し、それぞれ主に研究、大学院教育、学部教育を担当する副研究院長、副学院長、保健学科教務委員会委員長と共に月2-3回のペースで研究院長室の円卓を囲み、文殊の智慧を絞り出しています。特に、限られた教員人件費ポイント内で、学部教育に係る当初の専攻教員数に配慮しつつも、研究院活性化のために柔軟かつ適切な教員配置を実現することは大きな課題でしたが、それも教員候補者選考委員会の組織方法の変更や論文業績ポイントによる採用基準の導入により、一歩前進できたのではないかと考えています。更に、人件費ポイントに関連して北大では、女性教員採用によりその職位ポイントの1/4が次年度から3年間付与される「女性教員の積極的採用のためのポジティブアクション北大方式」が導入されています。保健学科及び本研究院はなぜかその対象外でしたが、昨年10月からようやく要望の一部が叶えられました。本方式は、女性研究者の現割合12.5%を2020年までに20%に増やすという、いわゆるトリプル20達成へのインセンティブ制度ですが、本研究院は既に女性教員が43%に達し、トリプル20に大きく貢献しながらも本制度の対象外でした。今回の改正でもやはり看護系分野は対象外のままで、他の分野は他部局と同様の扱いとなり、部局

外人件費ポイントが少しでも利用できる手段を得たことの意義は大きいと言えます。

さて、医療短大から医学部保健学科、大学院設置と組織が拡大し、その都度学生定員も増加してきましたが、教育・研究施設は旧態依然として狭隘・老朽化が著しい各種学校・短大仕様のままでした。学生及び教職員全員が悲願としていた新棟増築と既施設改修は、耐震化補強優先のもとに先送りを余儀なくされてきました。しかし今年度、本研究院からの施設整備事業要求が可能となったことにより、本施設の窮状が全学的に広く認知され、その結果、要求実現へのロードマップ提示や一部施設改修の前倒し着工など、本学の英断に感謝の意を表したいと思います。また、厳しい研究環境で地道に研究成果を積み上げ、大型プロジェクトの分担研究者として本研究院の複数の専任教員が活躍している実態や「潜在助産師のための再チャレンジ支援プログラム」による社会貢献なども大いに評価された結果と考えています。



次に、保健医療系大学院としては恐らく全国初と思われる取り組みを紹介したいと思います。それは、経営感覚に優れた高度医療専門職を養成することを目的として、小樽商科大学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻と大学院間協定を締結し、本学院修士課程2年次と小樽商科大学専門職大学院1年次を昼夜にオーバーレイさせた特別コースの設置です。オーバーレイ分の授業料免除と3年間で修士(保健科学又は看護学)と経営管理修士(MBA)の両学位取得が可能となります。昨年

8月1日に本学大学院農学院と共に調印式に臨み、この協定締結は新聞各紙に報道されました。本学院修士課程第1期生から適用し、すでに2名がこの特別コース候補者として決定されています。上記以外にも、大学院生数に応じた指導教員への研究費助成、専任教員や学生（大学院及び学部）のIF付き英語論文に対する研究助成制度、中央研究室整備と担当助教の採用（詳細は本号別稿）が実施され、次年度からは初の寄附分野設置、保健学科の臨床教育充実化と指導強化を目的とした臨床指導教授制度の導入（称号付与制度）や新顕彰制度の導入、国際交流や年報発行のための専門部会の設置なども予定されています。このように、この数年はインフラ整備とインセンティブ制度の充実など部局組織の基礎固めが続きますが、最大の懸案は来る5月に控えている大学院博士後期課程（平成22年4月設置予定）の申請です。すでに学内ヒアリングを経て第1回文部科学省ヒアリングを終了し、次回へのヒアリングに向けての再検討や微調整を行っています。昨年度末からのこの数ヶ月間に各方面の皆様から博士後期課程設置に係るアンケート調査のご協力をいただき重ねて御礼を申し上げます。

若い学生さんのパワーは保健学科・保健科学院・保健科学研究院活性化の原動力となっています。学部教育・卒業研究の充実を図り、大学院生の勉学研究意欲を刺激することは取りも直さず部局活性化に直結します。是非、保健科学という発展途上の学問領域を既成概念に囚われず自ら開拓する情熱を持ち続けてほしいと思います。その時に必ず幸運の女神が宿ることを信じて。

□ 研究室紹介：中央研究室

病態解析学分野 千葉 仁志

病態解析学分野の千葉と申します。今日は皆様に、私の研究室と、私が室長を勤めている中央研究室を紹介いたします。私の研究室は、化学的な視点と方法に重点を置いて、臨床検査法を研究しています。簡単に言うと、臨床化学の研究室です。臨床検査法といっても、ターゲットは、病院の臨床検査だけでなく、予防医学・機能性食品開発・創薬につながる検査を重視しています。得意とするのは脂質及び脂質代謝関連物質です。

脂質というと皆さんは動脈硬化を連想されますね。確かに冠動脈疾患に代表される血管病は脂質研究の最大のターゲットです。しかし、1990年頃からメタボリックシンドロームの概念が出てきて、脂質研究の世界が広がっています。例えば、非アルコール性脂肪性肝炎（NASH）

という病気があります。これは、脂肪肝から出発して肝炎、肝硬変、肝がんへと進行すると考えられる病気で、日本人患者は100万人と推測されています。この病気の患者さんはほとんど例外なくメタボリックシンドロームの患者さんですので、メタボリックシンドロームの肝臓における表現型とみられます。肝臓への脂質蓄積に加えて酸化ストレスが原因と考えられています。また、慢性腎臓病（CKD）という病気は、原因は何であれ腎臓の異常が長期に持続する場合につけられる病名ですが、軽度のものも含めると日本人高齢者の約50%がCKDであると考えられています。メタボリックシンドロームはCKDの発症や増悪と関係すると考えられています。また、アルツハイマー病に関する最近の研究で、患者さんの脳や血液でプラズマローゲンと呼ばれる特殊なリン脂質が減少することが発見され、これが病因とも関連すると考えられています。このように、脂質研究のターゲットは、血管病から肝・腎・脳などの重要臓器の障害へと広がっており、今後も更に広がるだろうと私は考えています。

この脂質研究の発展期にあつて、従来の血管病を想定したバイオマーカーでは病態解析や鑑別診断を十分に行えなくなっており、それぞれの臓器障害に特異的なバイオマーカーを新規に開発する必要に迫られています。特定臓器の機能を障害する悪玉脂質や、臓器機能を支える善玉脂質、及び、それらの代謝に関連する物質を見出し、それらを食品や薬品によってコントロールする方法を開発し、疾患の予防や改善に役立てなければなりません。私の研究室が目指すところはここに 있습니다。現在、研究室で進行中のテーマは、①悪玉脂質の過酸化脂質測定系開発、②肝疾患に特異的な悪玉リポ蛋白測定系開発、③small dense LDLの光工学的測定法開発、④超善玉HDLの測定系開発、⑤プラズマローゲン測定系開発、⑥原発性アルドステロン症のスクリーニング法開発、⑦クルクミン（ウコン成分）測定法開発、⑧カーボンナノチューブセンサーによるリアルタイム生体計測の開発、⑨脂質代謝改善作用のある食品素材開発、などです。多くは北大の研究者、他大学、企業との共同研究です。

カーボンナノチューブという脂質研究から離れて聞こえますが、予防医療に適した検査デバイスを考える必要がありますので、工学系の先生がたともここ数年は共同研究を続けています。ウコンは最も有名な健康食品の一つですが、ヒトにおける吸収・代謝・動態は不明といってよく、ほとんどの報告は農学部の先生がたの動物実験です。私は、健康食品の効果や問題点をヒトにおいて

科学的に評価することは保健科学研究院に最も適した仕事の一つだと思います。原発性アルドステロン症は、主に副腎皮質腺腫が原因で高血圧を生じる病気です。この病気は私の研究者としての生い立ちと関係があります。私は内科時代に、この病気のスクリーニングに役立つ特殊な尿中ステロイドの化学合成と測定系開発を目的として、北海道医療大学（当時東日本学園大学）薬学部で研究を行いました。連日、朝から夜中まで合成化学者（現在の医療大薬学部長の黒澤隆夫先生（当時講師））から1対1の薫陶を受けたのは25年も前のことですが、それが私を検査研究へと導きました。近年、原発性アルドステロン症が高血圧症全体の6～8%を占めることが明らかとなり、アルドステロンの血管・心臓障害作用も発見されましたので、スクリーニング法のリニューアルに挑戦しています。その他、以前には文部科学省の人類学班やがん疫学班に入り、ヒマラヤから北極圏までモンゴロイドを追って遺伝子やウイルスを調べたこともありますが、これは現在休業中です。

実験設備は、中央研究室に設置したものも加えると、超遠心装置、クロマトチャンバー、遺伝子解析装置（PCR、シークエンサー、リアルタイムPCR）、生化学自動分析装置（Hitachi-7170, LPIA）、ELISA装置（比色、発光）、キャピラリー・ガスクロマトグラフィー装置、高速液体クロマトグラフィー（2式）、高速液体クロマトグラフィー・質量分析装置（定性分析用イオントラップ型）、高速液体クロマトグラフィー・質量分析装置（定量分析用トリプル四重極型）などがあり、着任後4年目にしては大変に充実できたと思っています。特に、定性と定量の2台の質量分析計を保有している研究室は日本でもほとんどありませんので、北大そして日本の脂質分析センターになるべく努力したいと考えています。〔写真1〕



写真1 イオントラップ型定性用質量分析計（第4中央研究室）の実験風景

私の共同研究者は、神 繁樹助教（中央研究室担当）、修士1年3人（櫻井、福田、高橋）、研究生1人（男澤）、酪農学園大学修士1年1人（角南）、北海道文教大学講師1人（鈴木）です。病態解析学分野の吉田 繁助教ともHIVや肝炎ウイルスで共同研究をしていますが、こちらは吉田先生が主役です。4月から8月までは検査技術科学専攻4年生数名が加わり賑やかです。更に、小林研究院長（モノクローナル抗体開発）や、北海道医療大学薬学部（化学合成）、農学研究院（食品開発）、創成科学共同研究機構（バイオセンサー）、医学研究科（動物・細胞実験）の先生方とも密接な共同研究体制にあつて、教員、学生、研究員が互いの研究室に出入りしています。特に、医療大の恵 淑萍講師には脂質化合物標品の化学合成を全面的に担当していただき、私の研究室の化学的基盤を固めてもらっています。私は一つの研究室で先輩や後輩に囲まれて育った経験がなく、格好よく言えば一匹狼で来ましたので、そのことが他大学や他学部の先生方と良い関係を作るのに役立ったように思います。〔写真2〕



写真2 平成20年度卒業研究打ち上げパーティー
後列右より、伊敏先生（医学研究科）、筆者、小林研究院長、恵先生（医療大薬）、後列左 神先生（中央研究室）。

最後に中央研究室長として一言。私は以前に北大病院検査部に勤務していましたが、検査部職員に強く指導したことは、「患者さん、主治医を顧客として尊重し、最

善の検査結果を最速で返せ」ということです。私は中央研究室長としても同じ姿勢で臨みます。顧客は研究者、学生の全てです。

中央研究室担当の教員として2008年10月に着任された神 繁樹先生は北大理学研究科出身の農学博士で、分析機器メーカーの勤務経験や他の研究機関で研究支援にあたった経験があり、化学的な分析、特に質量分析計を得意としています。中央研究室の研究支援サービス提供に熱意を持っていますので、何なりとご相談ください。共同研究は特に歓迎致します

□ 社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業「潜在助産師のための再チャレンジ支援プログラム」について

基盤看護学分野 良村 貞子

本プログラムは、平成19年度から21年度までの3年間、文部科学省から社会人の再チャレンジを支援する目的で事業を委託されたものである。

現在、急激な産科医不足が顕在化し、母子保健の危機的状況が社会問題となっている。北海道においても、札幌市に偏在化した医療提供体制下で、妊産婦の急変時に十分な対応ができなかったと報道された。この母子保健活動で重要な役割を担う保健医療専門職に助産師が存在する。しかし、助産師は女性に限定された国家資格のため、出産や育児等の様々な要因により、勤労意欲があっても就労を継続できない場合も少なくない。

本学では、大正10年に医学部附属医院に産婆養成所が開設された後、現在まで助産師養成を行ってきた。同養成所は、助産婦学校、医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻として改組され、平成16年、医学部に保健学科が開設後は、看護学専攻の選択コースで助産師を養成している。

そこで、本プログラムは、同専攻科助産学特別専攻の修了生および共同申請校の旭川医科大学の卒業生を中心に、主として30歳代から40歳代の潜在助産師12人程度を対象に、再就職に対する躊躇や不安を軽減し、保健医療の現場で求められる最新の知識およびスキルを修得する内容を展開すべく、平成19年9月より募集を開始した。

本プログラム内容は、1. 助産師として自信を取り戻すプログラム（元気づけプログラム）として、医療現場の見学および実践と、助産学、母性看護学、小児看護学、地域看護学等の各科目及び関連科目の履修、2. 助産師と



しての自己能力の再発見プログラム（強み発見プログラム）として、セルフ・アセスメントとピア・レビューを行い、3. 再チャレンジのための能力獲得プログラム（スキルアッププログラム）で、育児支援など各専門領域に特化したスキルの修得を目指すものである。また、本プログラムの特色は、個々の就労ニーズに合わせた個別支援にあり、家庭環境や社会的要因の分析と調整について助言を行っている。なお、就労に関する情報は北海道看護協会等との連携のもとで提供している。

平成19年度の1期生13人中6人（常勤2人、非常勤4人）は再活動を開始し、他の数名が平成20年度も引き続き受講している。また、新たに2期生11人が受講し、10月以降、ベテラン助産師からの技を伝承するフォローアッププログラムを開講中である。

□ MIT 短期留学報告

医用生体理工学分野 小笠原 克彦

平成20年8月から11月までの3ヶ月間、日本放射線技術学会による助成のもと米国 Massachusetts Institute of Technology に訪問研究員として留学する機会を得た。留学先は MIT のビジネススクールである Sloan School of Management, Center for Digital Business の中にある、秋山教授のもと米国人研究員2名、日本人研究員1名で構成されている Health Group である。この研究グループでは、医療安全や医療マネージメントのための情報技術開発、患者・医療者間および地域医療連携における情報の役割などについて研究を行っている。本報告では、MIT という大学、MIT での研究と Skype、米国の放射線技師教育、Boston での生活について、私が感じた点を中心に簡単に述べたい。

(1) MIT という大学

MIT はノーベル賞受賞者も数多く、世界でもトップレベルの理工学系大学院大学であることは説明不要であろう。このような環境に3ヶ月在籍して、一番感じたこと

は「社会のためになる研究」を誰もが意識しているように感じた。理工学系の研究だけではなく、経営学、心理学、社会学などの研究もトップクラスであることは、「技術科学は社会に対して何ができるか」というビジョンが明確になっているからこそであろう。MIT で開発された技術が世界中で利用されているのは、例えばコンピュータ・サイエンスと経営学といったように学際的な混成チームでの研究が活発に進められ、開発された技術による社会の影響を常に考えているからではないだろうか。

Boston 滞在中、時間が許す限り MIT や Harvard 大学の公開講演会や大学院生の研究会に出席するように心がけた。複数の大学院生の研究会での発表を聞く範囲では、MIT の大学院生の半数以上は留学生であることも考慮しても、研究のレベルや内容は北大の大学院生とそれほどの違いがないように感じた。言葉の壁は低くはないが、今後、北大と MIT の大学院生と一緒に研究する機会を作りたい。

(2) MIT での研究と Skype

研究室では、小さいながらも研究ブースを頂き、ミーティング時には言いたいことを英語で伝えられない悔しさを感じながらも、十分に研究に集中できる贅沢な時間を頂いた。研究内容の詳細については省かせて頂くが、今後の研究において、医療情報学・医療マネジメント研究を進める上で、様々な視点を得ることができ、研究の幅が広がったことを実感している。

Boston 滞在中の大学院生や学部学生への研究指導は、時差の関係で Boston 時間朝 5~6 時開始ではあったが、インターネットによる無料の Skype を利用して実施した。ほぼ毎週、ゼミを行っていたせいか、私が帰国しても大学院生・学部学生は殆ど懐かしさを感じなかったようである。

(3) 米国の放射線技師教育

Boston 滞在中、米国の放射線技師教育事情を視察するために、Harvard 大学医学部と同じ Longwood Medical



Area にある Massachusetts college of Pharmacy and Health Sciences(MCPHS)を訪問した。この大学は米国でも 4 番目に古い薬学部を持ち、その他、健康科学、看護、放射線技術などで構成される。米国の放射線技師免許は、日本とは違い領域毎の細分化された免許制度であることから一般撮影・放射線治療・核医学・MRI から主専攻・副専攻を選択する教育システムであり、更に、臨床実習が中心であった。

米国では放射線技術系の大学院は少ないようであるが、一昨年、米国放射線技師会(AART)と米国放射線科医会(ACR)が共同で、放射線技師の専門性を高めた大学院相当専門職として Radiologist Assistant を設置したことから、この大学院コースを設置する予定とのことである。MCPHS には日本からの留学生はいないとのことであったが、希望者がいれば是非、受け入れたいとのことであった。

(4) Boston での生活

渡米時 1 ドル 120 円のトラベラーズ・チェック(TC)を数万円ほど購入したが、滞在中にリーマン・ショックが発生し、悲しいかな 1 ドル 90 円前半となり、結局、TC は 1 枚も使用しないまま帰国した。Boston は、厳冬期は札幌と違い雪が降らない分、寒さが厳しいと聞くが、私が滞在した夏から秋にかけては札幌と似た気候でもあることから、とても快適であった。

アパートもビーコンヒルと呼ばれる建国時からの住宅街であったため、とても風情と落ち着きがあり、治安も問題なく生活することができた。また、米国は Boston から始まったと言われている土地でもあり、街中が観光名所であることから、土日は観光三昧であった。英語は帰国する頃には大分慣れたが、言いたいことを伝えるにはまだまだトレーニングが必要であると感じている。機会があれば、是非、もう一度留学してリベンジを果たしたい。

最後になりますが、今回の短期留学を快くご許可頂きました保健科学研究院長 小林先生、短期留学の受入を快諾して頂きました MIT 秋山先生、不在中の教育・業務をバックアップして頂きました医用生体理工学分野主任 酒井先生、保健科学コース主任 齋藤先生をはじめとする先生方、渡米手続きや不在中の事務処理を快く対応して頂きました向井地事務室長をはじめとする事務職員の方々に深く感謝いたします。

□ 報告事項

○ 医学部保健学科長賞表彰式の実施

保健学科4学年に在籍し、特に専門課程で優秀な成績を修め、他の学生の模範となると認められた5名の学生に対し、第2回表彰式を平成20年9月18日(木)に保健学科大会議室において挙行了しました。

平成20年度(第2回)医学部保健学科長賞 表彰受賞者

看護学専攻	4年	塚本記子
放射線技術科学専攻	4年	若生理佳
検査技術科学専攻	4年	天野志寿香
理学療法学専攻	4年	前田泰平
作業療法学専攻	4年	秋山なつ



第2回保健学科長授賞式

平成19年度(第1回)医学部保健学科長賞 表彰受賞者

看護学専攻	4年	荒川結
放射線技術科学専攻	4年	加藤友理
検査技術科学専攻	4年	葛西まどか
理学療法学専攻	4年	小島尚子
作業療法学専攻	4年	工藤亮



第1回保健学科長授賞式

○ 平成20年度受賞状況

- a. 受賞・表彰名称と授与機関(授与者)
 - b. 受賞論文名, 研究題目名または受賞理由
 - c. 受賞者名(敬称略), 受賞日時
- ①
- a. 滝内賞(日本放射線技術学会)
 - b. 診療放射線技術学教育に関する研究成果
筆頭論文4編(原著論文6編)
 - c. 小笠原 克彦, 平成20年4月5日
- ②
- a. 奨励賞(日本臨床化学会)
 - b. HIV薬剤耐性検査標準化のための検討
 - c. 吉田 繁, 平成20年8月30日
- ③
- a. 優秀論文賞(日本成長学会)
 - b. 遺伝および環境要因と思春期の成長, 栄養状態
—南太平洋ソロモン諸島の3集団の比較—
 - c. 山内 太郎, 平成20年11月1日

○ 平成20年度研究助成金獲得状況

- a. 財団等名称
 - b. 獲得者名(敬称略), 助成金額
- ①
- a. (財)日本リウマチ財団
 - b. 石津 明洋, 100万円
- ②
- a. (財)旭硝子財団
 - b. 山口 博之, 200万円
- ③
- a. (社)日本放射線技術学会
 - b. 小笠原 克彦, 70万円
- ④
- a. 臨床検査精度管理奨励会
 - b. 吉田 繁, 25万円
- ⑤
- a. (財)三菱財団
 - b. 山内 太郎, 100万円
- ⑥
- a. (財)ファイザーヘルスリサーチ振興財団
 - b. 渡辺 玲奈, 183万円
- ⑦
- a. (財)寿原記念財団
 - b. 石津 明洋, 100万円
- ⑧
- a. 公益信託臨床検査医学研究振興基金
 - b. 吉田 繁, 50万円

○ 産学協同研究成果報告

平成21年1月22日に(株)内田洋行北海道支店において、PULSEチェア発表セレモニーが行われ、代表取締役会長向井眞一様からPULSEチェア15脚が本研究院に寄贈されました。

この椅子は、(株)内田洋行の産官学共同開発製品で、本学研究院の八田達夫教授と北海道立心身障害者総合相談所の西村重男氏が共同研究しました。PULSEチェアの発

想と技術は重症心身障害者の特殊な車いす研究の成果をベースとしています。重症心身障害者にとって座ることはコミュニケーションや日常生活活動の遂行にとっても重要とされます。しかし、脳障害による筋緊張の亢進、筋力低下、筋作用の非対称、更にこれらにより引き起こされた脊柱や骨盤の変形は椅子に座ることを困難にさせます。

八田達夫教授と西村重男氏は、このような座ることが難しい人々を座らせる技術（アクティブバランスシーティング）を研究開発してきました。障害のない人々ほどのような椅子にも座ることができます。しかし、重度障害の人は座りのポイントを押さえた椅子にしか座ることはできません。ヒトとしての共通項を前提にすると、障害のない人々に対しては、もっと楽に座らせることができるのではないかと考えられました。今回の開発過程は、障害が重たい人々によってもたらされた成果が、障害のより軽い人々や障害のない人々の役に立つことにつながる一つのモデルと考えられています。



八田教授のプレゼンテーション

□ 『心肺蘇生用マネキンおよびAED トレーナー』 納品のお知らせ

さる2月26日、保健科学研究院共有の備品として、「心肺蘇生練習用のマネキン（レサシアン心肺蘇生全身モデルスキルガイド付）およびAED トレーナー（1セット）」が納品となりました。

これを受け、本研究院でも院内講師による、気軽に受けられる『教職員向け心肺蘇生法講習会』が3月9日より開催されています。今後も繰り返し開催される予定ですので、講習会未経験の方や受講経験はあってもしばらく間があいてしまった方など、どなたでも気軽に参加できますので、まずは一度ご参加ください。



心肺蘇生用マネキン

□ 火災訓練よもやま話

機能回復学分野

高橋 光彦

火事場に入ったことは2回ある。1度目は自宅前が火事で直ちにいったとき、中にはプロパンボンベらしきものがそばにあり一瞬ぞっとしたが、バケツリレーで鎮火。後から消防署の人が来ていろいろと聞かれたので、感謝状でもあるのかなと思ったらそれっきり。2度目は某国立研究所内での出火、そばにあった消火器を操作して火元に振りかけようとしたら、消火剤がなくなってきていて、ちよろちよろ状態、複数の人が消火器をもって駆けつけたため鎮火でばけをかましてしまった。

12月の火災訓練での救助袋経験話を少し。降りてくれとの依頼に、以前の脱出訓練で5階から落下するような勢いで急下降し上肢に多数の擦過傷を負った某先生の記憶がトラウマのように蘇り、アキレス腱断裂の既往を理由にその気はなかった。3階の会場に行くと、救助袋体験予定の学生2名と機器担当者2名がいて、他の専攻からの参加者はいないとのこと。水野さんが到着し、同じ教室にたむろっている学生を外に行くように指導したのちに脱出物語は始まった。

- 1 まず救助袋の取説を見て、金属カバーを外す
- 2 直下に人のいないことを確認
- 3 救助袋を下に落とす
- 4 入り口の骨組みを押し込んで固定する
- 5 足から入る

と話を聞いているうちに学生二人が次々と下に落下。なんか、出来そうな気がして、下を覗きギャラリーがいるのを期待したら、当専攻の学生だけが注目している。意を決して袋に入ってみれば、中は雲の中の様相、足下が見えないためもがかないと下に落ちていかず、もがき

続けて行くも、今どの辺を進んでいるのかさっぱりわからず、3階の落差が長く感じられたが不安感はまるでなし。受けを狙って、落下途中でズボンをめくり体操の着地のようにして娑婆に出てみれば、一人芝居でうけなし。何事も実際にやらないと本番では使えないし、救助袋の出し方の説明書を火事の最中に読む暇はない。フロアーに設置された救助袋の取り扱いを全員が知っておくことが大事。

と、書いているうちに、我が家の3軒隣りが3月1日に火事になり、午前9-12時まで消火活動、鎮火したと思ったら、午後1時過ぎからまた燃え始め、再度消火活動。その日は高校の卒業式だったので、火災時間帯は家族共々全員不在。午後1時半頃に蕎麦「あかね」にて奥様の携帯が鳴り、知人から「火事で大変でしたね」、えー！午後2時に帰ってきたら消防車が5-6台集結し、周辺の道路には、立ち入り禁止の黄色いテープ。どうにか我が家にたどり着き、隣家の状況を見れば3階部分がかなり消失、窓から水がポタポタたれ、屋根の鋼板は曲がっていたが、延焼しなかったことと、けが人が出なかったことが救いであった。深夜、翌日まで、消防車、警察が火事場に待機。

火の用心、火の用心は職場でも家でも必修。

□ 人事異動

〈辞職〉

平成21年1月31日付

教務担当事務補助員 中田 智子

〈採用〉

平成21年2月16日付

教務担当事務補助員 名瀨 彩音
(なぶちあやね)



2009年札幌雪祭り大通り会場

□ 事務室便り

主な業務の役割分担をお知らせします。

業 務	担当者 (内線番号)
○総括	向井地 (3338)
○教授会関係 ○諸会議関係	杉 山 (3315)
○兼業関係 ○非常勤職員の採用関係 ○倫理審査の申請関係 ○諸手当関係	菊 池 (3316)
○謝金関係 ○会計・営繕関係 ○HINES関係 ○奨学寄附金の申請関係	吉 田 (3333) 水 野 (3333)
○科研費・助成金の申請関係 ○出張・休暇関係 ○建物貸付の申請関係	藤 田 (3333)
○就職関係 ○国家試験関係 ○入学試験関係	三 浦 (3318)
○授業時間割関係 ○奨学金関係 ○授業料免除関係	中 島 (2135)
○講義室等の整理 ○求人情報管理 ○証明書発行関係	名 瀨 (2135)
○図書・雑誌関係 ○文献複写関係	小 林 (3319) 木 下 (3319)

(編集委員) 広報室メンバー

伊達広行(広報室長), 小野塚久夫, 高橋光彦, 竹内文也, 山内太郎

発 行 北海道大学大学院保健科学研究院・広報室
060-0812 札幌市北区北12条西5丁目

連絡先 庶務担当

電 話 011-706-3315

E-mail web@hs.hokudai.ac.jp

URL <http://www.hs.hokudai.ac.jp>